雨雲の重苦しい雰囲気を払拭するかのように、直線的な光がさしこんでくる。

夏独特の力強い色彩を背景にして、「ジー、ジー、チッ、チッ」と弱い音色がリズムをとっている。梅雨あけを待っていたかのように、小型のにいにい蟬が遠慮がちに鳴いている音だ。夏の日を鳴く蟬は、騒がしい昆虫の声楽家である。一斉の鳴き声は、あたかもにわか雨。蟬時雨とはよくいったものだ。蟬は、腹部の部屋に特設された薄い鼓膜を強い筋肉力で振動させて鳴く。鳴くのは雄で、雌を唖蟬といったりする。

春に出るのが春蟬。緑が少なくなった昨今、あまり耳にできないのが残念だ。一般的に蟬といえば油蟬。大型の強い声が、「ジー、ジー」と油を揚げるように鳴く。みんみん蟬は、深山蟬。「ミーン、ミーン」と高い声が売りものである。東北では珍らしいが、関西で多いのが熊蟬。「シャー、シャー」とヤスリをかけたように、いけしゃあしゃあと鳴く。気障りな蟬とでもいおうか。東北で普通聞ける蟬は、蝦夷蟬だが、七月中旬の短期間、幸運であれば姫春蟬の音が楽しめる。数が少ないので天然記念物に指定されているほどである。

蟬は夏。夏は汗しての夕餉どきに、「カナ、カナ、カナ、カナ」と涼しい声を耳にするのは、実に印象的で、疲れもひととき忘れてしまうほど心地よい。これは、日暮れ夜明けの蜩のなぐさめの声である。子供のころは、かなかな蟬などといったものだ。蟬の声も、「ツクツクホーシ、ツクツクホーシ、オーシーツクツク、オーシーツクツク」を耳にするころは、秋風が立ちこめる季節となる。つくつく法師とは、その秋涼を連想させる鳴き声をとったものであろうか。

横井也有は、「つくつく法師と云ふ蟬は、つくし恋しと云ふなり。筑紫の人の旅に死して、この物になりたりと、世の諺に云へりけりし」（鶉衣・百虫譜）と述べている。実際今でも近江地方では、「つくしこひし（筑紫恋し）」と呼んでいるそうだ。

ところで、蟬は成虫としての生命は数日の短命だが、幼虫から蛹までの過程が長いことでも有名。油蟬で七年といわれ、蛹が地上に姿を見せて背より割れて皮をぬぐ。夏休みの昆虫採集に蟬をとりに行き、蟬はとれずにこの脱殻を見つけてよろこんだものだ。この蟬の殻を蛻という。いわゆる蛻の殻である。ところが、昔からむなしいことやはかないことのたとえに、「うつせみ」と表現する。「万葉集」などで、これに空蟬、虚蟬をあてたので、蟬のぬけがらを連想させるが、もともと蟬とは関係がない。「うつせみ」は「うつしおみ」の転じたもの。この世に生きている人、また現世、人の世である。枕詞となって、世・人・命にかかることから、禅における無常感とあいまって、人の命のはかなさ、むなしさの意味をもつようになった。したがって、「うつせみ」は、「もぬけのから」ではありえない。

蟬の羽根は薄い。連想ゲームではないが、薄いものは夏衣。「蟬の声聞けばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」（紀友則「古今集」巻十四恋・七一五）となると、人の心が薄情になることを歎いたものである。ともすれば、乾燥しきったようないまのこの人のつながりの中で、じっくり味わってみたいような気がするが、どうであろうか。

表通りの小型トラックの拡声器から、「きんぎょお、え、きんぎょ、きんぎょお」と響いてくる。その余韻が、照りかえしの息苦しい陽ざしに反射して、四方にとびちる。

いま、水玉模様が、目に涼しい季節を迎えた。

（ひ）